

木村 久邇典（きむら・くにのり）

1、プロフィール

文芸評論家。山本周五郎研究・評論の第一人者で著作が多い。直接師事した太宰治の回想『太宰治と私』（昭和 51 年）をはじめ、太宰治に関わる周辺作家のエッセイもある。

<生没>

1923(大正 12)年7月 11 日～2000(平成 12)年4月 12 日

<代表作>

『太宰治と私』『在りし日の太宰治』『人間 山本周五郎』『山本周五郎襟記』『山本周五郎』(上・下 2 巻)

<青森との関わり>

札幌市生まれ。両親の故郷西津軽郡木造町で育つ。戦後、金木町に疎開中の太宰治を訪ね、師事するに至る。

2、作家解説

大正 12(1923)年北海道札幌市生まれ。両親の故郷である青森県西津軽郡木造町(現つがる市)で育つ。昭和 16 年中央大学予科入学。19 年海軍予備学生。20 年秋復員、21 年中央大学法学部卒業。労働文化社編集記者となり、昭和 37 年朝日新聞社東京本社校閲部に転じ編集局勤務となる。

太宰治と。学生時代から太宰文学を愛読。最初に読んだのが「帰去来」。「富嶽百景」に接し、精神の激しい痙攣を覚えたという。三鷹在住の太宰に会いたいと願望。戦後、太宰が疎開中の金木町で叶えられる。以後太宰の死まで師事が続く。太宰に関わる最初の文章は、師事した仲間や旧友が思い出を書き寄せた『太宰治の肖像』(昭和 28 年 楡書房)への記事。太宰と周辺の文学者の回想をまとめたのが『太宰治と私』(昭和 51 年 小峯書店)である。その中で直接太宰を扱ったのは、「太宰治と私－宿命の創造－」、「話術の天才」「税金とプチブル趣味」

「『如是我聞』をめぐって」である。太宰周辺の文学者については「太宰治と安吾・作之助」「『火宅の人』が語るもの一檀一雄の死」「小山清さんのこと」「無頼派と戦後」などがある。他に「在りし日の太宰治」(平成8年「太宰治研究」3号)。テレビ脚本に「太宰治の津軽」がある。

山本周五郎と。青森県の風土や作家に興味を持っていた山本周五郎が、木村久邇典の故郷が木造町と知り親近感を抱く。木村は労働文化社編集記者時代に山本係となり戦後20年余も彼の身辺にあった。山本への傾倒が深く、山本周五郎研究・評論の第一人者となる。全集、文庫解説が多く、著書も『人間山本周五郎』(昭和43年 講談社)『素顔の山本周五郎』(昭和45年 新潮社)『山本周五郎襟記』(昭和45年 中央大学出版部)『山本周五郎のヒロインたち』(昭和54年 文化出版局)『男としての人生ー山本周五郎のヒーローたち』(昭和57年 グラフ社)『山本周五郎はどう読まれてきたか』(昭和61年 新潮社)『周五郎に生き方を学ぶ』(平成7年 実業之日本社)『山本周五郎』(上・下2巻 平成12年 アールズ出版)など多数にのぼる。

なお、「青森県と山本周五郎」(「月刊あおもり」昭和44年7月号)がある。この記事は『山本周五郎襟記』に収められているが「津軽と山本周五郎」と改題されている。

3、資料紹介

○『太宰治と私ー宿命の創造ー』

図書

1976(昭和51)年7月15日

縦244mm×横177mm

太宰治を疎開中の金木町(現五所川原市)を訪ね(S21. 2)てから、三鷹引き上げ(S21. 11)、その死まで(S23. 6)の交遊を、太宰の作品をまじえての回想文。末尾の著者メモ「宿命の創造」で、太宰文学は、人間への不信、芸術への絶望、既成道徳への反逆であったと結ぶ。